

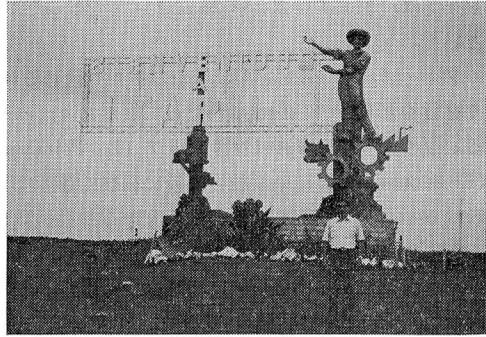
エンカルナシオンの日々

渡 辺 恒 雄

パラグアイ共和国の第3の都市エンカルナシオンを最初に意識したのは、今から16年前の1969年の事である。当時、私は農業技術研究所へ勤めていたが、ある日上司から部厚い航空便を渡され、中身を良く検討し返事を出して欲しいと頼まれた。それはパラグアイ国エンカルナシオンに住む石黒富雄さんという移住者からの手紙で、ダイズの乾燥標本も同封されていた。日系人の移住地で収穫直前のダイズの病害で困っている、病原菌や防除法などを教えてほしいという内容であった。そこで早速炭そ病による被害ではないかと返事を出したところ、折り返し丁寧な礼状を頂いた。その手紙には、移住地の様子なども書かれてあった。その後長い間この手紙のことは忘れていたが、1985年1月から3月まで南部パラグアイ農林業開発技術協力計画林業部門の短期専門家として、同国へ出張することとなり、もしかするとその手紙の主にお会い出来るかもしれないという淡い期待を抱いた。私がエンカルナシオンに着いて10日もたたないうちに、移住地の農協で主催している夏期営農講習会に引っぱり出され、CEDEFO（林業開発センター）の代表として話をした折に、石黒さんとの文通の件も話題にし彼の消息を知ろうとした。80人ばかりの聴衆は若い人が多く、石黒さんの消息は誰も知らない様であった。後日、色々な機会を見つけて、関係者に聞きまわったところ、石黒さんはどうの昔にアルゼンチンに移られ、エンカルナシオンには孫の石橋さんという方が住んでおられることを知った。なんとこの石橋さんとは、CEDEFOの職員の方のL. A. ISHIBASHIさんのことで、エンカルナシオン滞在中公私にわたりお世話頂いた方であった。

パラグアイ南部のイタプア県の首都エンカルナシオン（Encarnación）までは、アスンシオンから国道1号線を通り南東370kmの地点にある。車窓から眺めると、地形は平坦で高い山は全くない。森林もところどころに見られるが、全体が平坦で、その大きさはあまり印象がない。目につくのは広々とした草原だが、夏枯れのせいか全体的に元気がなく、草を食む牛もいづれも肉付きが悪い。角の上に添え木をして、大きな人工的な角を持つ牛がおり、奇妙に思っていたところ、これは牧場の柵を越えて外へ飛び出すのを防ぐためだという。それでも、国道をのそのそと歩いている牛を、何度か目撃した。国道といっても単線で、交通量も日本に比べ非常に少ない。時速100

km で飛ばすので、5 時間もかからずにイタプア県に着いた。ビエン・ベニドス・ア・イタプア (Bien Venidos a Itapua) と書かれた大きな看板をバックに、記念写真を撮った。アスンシオンに住宅を構え、週日はエンカルナシオンで働き、週末に家へ戻る生活を繰り返す人もいるようで、CEDEFO のリーダーの山垣さんも、アスンシオン、エンカルナシオンと CEDEFO のあるピラポの一地点を移動して生活していると笑っておられた。



イタプア県へようこそ

エンカルナシオンは、イタプア県の首都と言っても人口はわずか 4.5 万人、県内に日系人移住地が多いせいか、1000 人近い日本人が住む。川幅が 2.5 km もあるパラナ川が近くを流れ、対岸にはアルゼンチン国のポサダス市がのぞめる。現在はカーフェリーがこの川を往来しているが、来年になると、長い年月をかけた架橋工事が終り橋が完成するという。人口 13 万人のポサダス市との往来が自由になれば、エンカルナシオンにも活気が出るであろうし、ピラポ、フラム、チャムスなどの移住地周辺での林業振興にもつながると現地の人々は橋の開通を心待ちにしていた。

パラナ川は全長 4,500 km、世界第 8 番目の長い川で、ブエノスアイレスとアスンシオン間 1,600 km には、2,000 t 級の船が就航しているという。日本の川からは想像もつかない大河の中でも、子供は夕日を浴びながら川遊びに打ち興じていた。

エンカルナシオンには日本人の経営する旅館が 1 軒だけある。そのオテル・オダ (小田旅館) はパラナ川から 100 m も離れていない閑静な場所にあり、石畳の通りが家の前を横切っている。パラナ川沿いのこの付近一帯は、ゾナ・バハ (Zona Baja, 下町) と呼ばれており、近々ダムが作られ、水没することになるという。

小田旅館は、エンカルナシオンを訪れた日本人が一度は御世話になるところである。日本語は通じるし、日本食にもありつける。日本式の風呂もある。部屋数は 10 室もなく少ないが、それだけサービスが行き届いている。泊り客は日本人だけで、プロジェクト関係者で 1 年以上の長期滞在者もいる。すき焼きなど日本食を目当てによく宴会も開かれるし、日本からのビデオも見られる。パラグアイにいても、小田旅館では完璧に日本式生活を享受できる。

小田旅館から一寸歩くと賑やかな下町で、色々な店が軒を並べ、露店も多い。日本製の電算器や時計、ラジオなども盛んに売られている。山手へ通じる道路をはさんで、中華料理店と日本料理店が相対していた。この下町には 3 か所のカンビオ (Cambio, 貨幣交換所) があるが、あちこちの通りではペソ、ガラニー、ドルのヤミの売買が行なわれていた。私が滞在中のドル (当時 1 ドル 257 円) からガラニーへの交換

レートは、1ドルが394~428 ガラニーであったが、現在は500 ガラニーを越えているという。

ゾナ・アルタ (Zona Alta, 山の手) へ通じるエスティガリビア (Estigarribia) 通りを行くと途中数百 m にわたって坂があり、パラナ川やポサダス市の眺めを楽しめる。坂の途中には学校〔プリマリア (La Primaria) は日本の小学校、セクンダリオ (El Secundario) は中学校と高校に相当、前者は5年間 (6~11才) の義務教育、後者は6年間 (12~18才) の自由教育を行う〕があり、女子生徒の制服姿は日本とほとんど変わらない。坂を登り切ると、大きなバスステーションがあり、県外の主要都市へのバスがここから出る。山の手 の中心地は、高い塔のあるアルマス広場 (Plaza de Armas) で、小田旅館から徒歩で約30分の道のりである。ここまで来ると、下町の喧騒は全く聞かれない。この通りの周辺には、日本人経営の食堂や店が何軒かある。暑さを避けて建物の外に座席を設け、夕涼みをしながら食事をしている光景が夜遅くまで見られた。近くにはカジノ (Casino, ギャンブル場) もあり、時々日本人の姿も見られた。広場の裏手には、アジサイ (Confiteria HORTENSIA) という名前の日本人経営のカラオケバーなどが、数百m 離れて点々とあり、夜な夜な日本の懐しのメロディーが流れていた。

1945年から1979年にかけてのパラグァイへの日本人移住者は8,914人を数えた。イタプ県の移住地の一つピラポ (Pirapo) は、1960年代になって入植を開始した比較的新しい移住地だが、約8万haの土地に現在およそ350家族が生活している。ここはCEDEFOPからわずか10kmの地点にあり、たびたびお邪魔する機会に恵まれた。ここを訪ねてまず目を引くのは、テラロソニアと呼ばれる赤褐色の土壌である。乾燥すると砂ぼこりがひどく、雨が降ればどろどろの状態となり、道路も車が通れぬ程にぬかるんでしまう。ピラポ地区は1戸平均約160haの土地を持つ大地主ばかりだが、これでも農業経営上せまいということであった。1980年には、ピラポの30haの土地がわずか51万円で購入出来たという。ほとどの農家も大型農機具を借金して買入れており、生活は大変苦しいようである。夏期の表作はダイズ (1戸平均60haの作付)、冬期の裏作は主として小麦である。パラグァイの農業は、異常気象の影響を受け易く、安定性に欠けている。この夏も雨不足で、ダイズの種子をまだ播けない農家が出ているとのことであった。

なお、日本人移住地の近くに、ドイツ人の移住地オブリガード (Obligado) やロシア人の移住地オエナウ (Oenau) があるが、それぞれ1900年と1930年代から入植しており、歴史が古いせいもあるだろうが、牧場と天然林を配した立派な家に住み見事な生活環境を作り上げている。これら欧米からの移住者の住宅に比べ、日本人の住宅は大方貧弱で、目前の現金収入をあてに、木をみな切り払い畑を増やしており、投機性の高い農業を考えると問題がないわけではない。CEDEFOPの関係者は、林業の重要性を盛んに説いて回っているが、日々の生活に追われる農家にとっては対応するのが困難にみえる。将来の農業経営の安定の為に、環境保護の為に、林業の重要性を認識し、1本でも多く植林してほしいと願うばかりであった。

〔参考文献〕 アルトパラナ20年史刊行委員会編：ひらけゆく大地 391 pp., 1980.